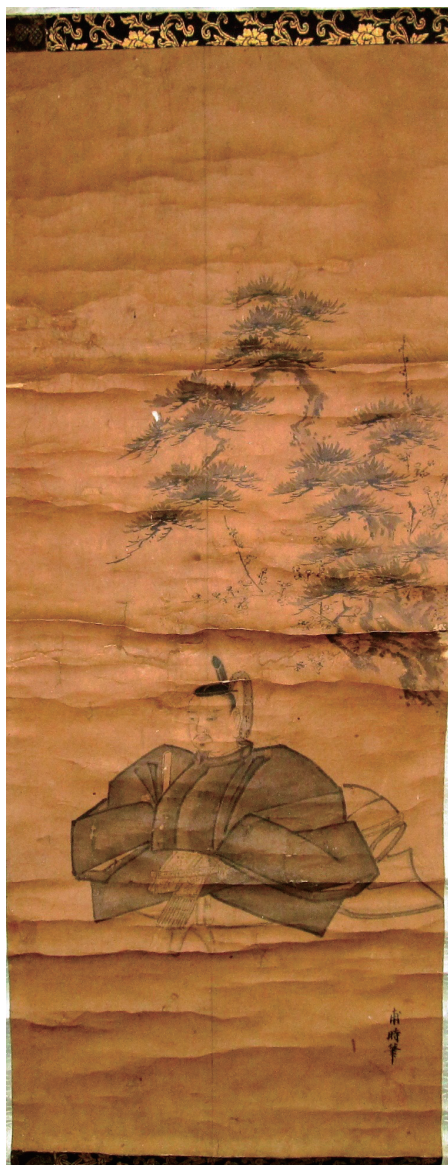


菅原道真



* 佐田家文書7「菅原道真肖像」

解説

菅原道真（845～903）は、平安時代前期の学者・政治家です。菅原氏という代々学者の家に生まれ育った道真は、宇多・醍醐両天皇の信任を得て、文章博士・讃岐守などを歴任し、右大臣にまで昇進しました。

894（寛平6）年遣唐大使に任命されましたが、かつての意義を失っていた遣唐使派遣の停止を建議して、実現させました。

しかし、道真の存在を快く思わない藤原氏との政争に敗れ、901（延喜元）年藤原時平の中傷で大宰府に左遷されて、そこで失意の内に亡くなりました。

後世道真の冤罪が明らかになる一方、朝廷や藤原氏に不幸が続く、天変地異も起こったことから、それらを道真のたたりと恐れた朝廷は、993（正暦4）年彼に正一位・太政大臣を贈り、神として祀りました。

やがて、道真の霊は怨霊の神から学問・芸能の神へと、さまざまな機能を獲得し、天神信仰の名で総括されるような多彩な内容をもつようになっていきます。

こうした天神信仰は、武士や上層町人、知識人たちの間で広まっていき、江戸時代になると天神講という信仰組織を通じて、民間に及びました。寺子屋でも毎月25日が天神講で、天神像の掛け軸を拝みました。寺子屋に通っていた子供たちにとって、「天神さん」は日常的で身近な神様だったのです。

写真は、萩藩上級家臣である問田益田家の家臣たちによって組織された講で使われていた天神像の掛け軸です。江戸時代の武士による天神信仰の一端を今に伝えてくれます。